



長い牙  
鋭い牙  
曲がりくねった牙  
汚れ欠けたノコギリ状の牙

ありとあらゆる牙が殉の身体を貫いていた。

ザグザグと咀嚼音が鳴る。

殉の両足は噛み砕かれ、胴体はひと噛みごとに潰れ、気味の悪い腸をはみ出させていた。

生きながら喰われる激痛に絶叫し、両腕で滅茶苦茶に『邪悪な口』を叩き続ける殉を、『魔眼』が笑いながら見下ろしていた。

精神世界で身体を傷付けられるのは心を直接破壊されるのに等しい。

殉が廃人と化するの時間の問題でしかなかった。

だ…め…だ…

………

………

…

爪の先程残っていた殉の意識が、微かに響く音を聴いた。

人…おんなの…ヒト…の…こえ…

それは少しずつ、だが確実に大きくなっていった。

『邪悪な口』の動きが、声の広がりと共に鈍くなってくる。

やがて声はデュエットのように高く低く響き始めた。

細く通った女性の声。

野太い男性の声。

声は、名を呼んでいた。

…

………

………ちゃ～ん…

…カナちゃ～ん…

カナちゃああ～んっ！！

…

………

………こお～…

…加夏子お～…

かなこおお～！！！！

『邪悪な口』の動きが止まった。

胸から下を挽き肉にされた殉は、牙の端に引っかかった状態でダラリと垂れ下がっていた。

生暖かい液体が顔を打ち、僅かに残った意識が戻る。  
ひどくしょっぱい。氣力を振り絞り重い瞼を持ち上げた。

『魔眼』が、泣いていた。

巨大な眼球に、涙があとからあとから溢れ出しこぼれ落ちてくる。  
どしゃ降りの雨に打たれるように濡れそぼちながら、殉は『魔眼』に向け両手を差し上げた。  
痛みは消えている。  
暖かい…

『邪悪な口』が消え去り、虚空に横たわった殉は元の姿に戻っていたが、彼はそれすら気付いていなかった。奇妙な至福感に包まれ、ほんのりと笑みを浮かべながら、それに手を差し伸べる。

『魔眼』は、いつしか小さな光の点へと変わっていた。  
小刻みに振動しながら、右へ左へ宙を漂っている。  
夏の夜の蛍のように、はかなくフラフラと飛び回る光。

『扉』だった。

戯れるように光を追い、殉が両の掌にそれを包み込むと、暗黒の風景に変化が生じた。

自分が遂に辿り着いた事を、彼は知った。

◇

奇妙な風景だった。  
草木は生えている。  
だが動くものは無い。  
虫一匹すらいない。

思慮無く作られたテーマパークのような。  
砂漠に置かれた箱庭のような。  
無風。乾いた空気。

コントラストばかり強い、どこか人工的な虚偽に彩られた場所。  
目に優しい緑が幾らあっても、豊かな印象は一つも持てなかった。

彼女はそこにいた。

殉は慎重に足を進めた。  
あの時の愚だけは避けねばならない。  
三度目の正直は無いだろう、たぶん。

加夏子は地べたに座り込み、抱えた両膝に顎をのせてボンヤリと遠くを眺めていた。  
あと数歩で手が届く所まで来ると、殉は足を止め、彼女のうなじの辺りを見下ろした。

「来ちゃったんだね」

わずかに顔を動かし、加夏子が肩ごしに呟いた。

「うん」

「来て欲しくなかった」

「うん」

「あのまま嘔み潰してしまえばよかったかもね」

「うん」

「そのつもりだった。ホントだよ。でも出来なかった。声がしたから。パパとママの声…なんか嬉しかったな」

黒髪に半分隠れた端正な顔が淋し気に微笑んだ。

「どうでもよくなっちゃったのよ。喰い殺したいほど憎かったあなたの事も、ね」

「…」

「ホント、もういいやってカンジ。ほっといてくれないかな。ワタシここにいる。ここでこうやって、バカみたい  
にずーっと死ぬまで座ってるから」

「みんな待ってるんだ、君を。どうしてそんなこと」

「信じられないから」

加夏子がゆっくりと顔をあげた。  
酷く哀しい表情で殉を見つめる。

「悪いことなんて何もしなかった。でも本当のママは病気で死んじゃった。誰にも意地悪なんてしなかった。でも斬られた、顔も知らない男に。素敵な男の子と知り合えた。でも喋る事も歩く事も出来ない。その子は私を助けようとしてくれた。でもその子のお兄さんと、私を斬ったあの男はそっくりだった」

「カナちゃん…」

「どうして私、こんな目に合うんだろ。たぶんこれからもずっと、こんな事が繰り返されるんだ。いつまでも、ずっとずっといつまでも」

「そんなことない」

「もういいの。明日なんて信じられない…ここで骨になるまで座ってればいいの」

そんなことないっ！

殉が叫んだ。

「待ってるひとがいる、帰る家がある、君にはあるんだよ！居場所が…君が居てもいい場所がちゃんとあるんだっ！」

激高しそうな声を必死に抑えつけながら、殉は加夏子に向かい言葉をぶつけ続けた。

「今までのなんだったっていうんだ？君はちゃんと生きてきたじゃないか。いろんな事があって、ペシャンコに押し潰されそうになっても、君は君のままで今までやってきたんじゃないか。初めて会ったあの日、君は坂道に登れなくて困ってた。嫌になってた。でも今みたいに投げやりじゃなかった！ 僕が手を貸したのは偶然なんかじゃない、君が自分の『声』で呼んだんだ！一緒に坂道を進んでくれる誰かを！！」

殉は必死だった。

ここで加夏子連れて帰れなければ、彼女の人格は確実に崩壊してしまう。

生の営みを、そこに生じる他者との交わりを否定し、拒否し、この無味乾燥な世界に閉じこもるといふのなら、現実世界での彼女の居場所は廃人専用のホスピスか、良くて精神病院の隔離病棟でしかない。

いけないんだ

こんな所にいちゃいけない

絶対にダメだ！

「カナちゃん、かえろう。みんなの所へ。大丈夫だから」

「…嫌。あそこには何も無い。あるのは苦しみだけ…もういいから帰って。一人で帰って。かえってよおお！！」

全ての景色が、ミイラのように色褪せ朽ちてゆく。

草木は枯れ、建物は轟音と共に崩れ落ちてゆく。

地震のような地鳴りが響き、大地は滅茶苦茶に裂けてゆく。

『内面世界の崩壊（インナー・ハルマゲドン）』と呼ぶにふさわしい壮絶な破壊が起きていた。

立っている事すら出来ず、殉は這いずりながら加夏子に手を伸ばした。

パツクリと地面が口を開ける。

轟という響きと共に、加夏子の小さな身体が亀裂の奥へと落ちていった。

くそおお～！！

殉はジャンプして加夏子の腕を掴んだ。

ダラリとぶら下がった加夏子。

視線は亀裂の奥、深淵を覗き込んだまま動かない。

「帰るんだ…みんなが…ボクがキミを待ってるんだ！ いっちゃダメだ！ カナちゃん、キミが好きなんだ！！」

**帰るぞおー！！**

**かなあああああー！！！！**

ピクリと加夏子の身体が動いた。